

「左手」に耳をすまそう！ エピソードでつづる ピアノの「左手」の歴史

岳本恭治 ●ピアニスト・音楽ジャーナリスト



たけもと・きょうじ ●武蔵野音楽大学ピアノ科及び国立音楽院ピアノ調律科卒業。ロンドン・トリニティカレッジグレード演奏家ディプロマを最優秀の成績で取得。1981年浦和交響楽団定期演奏会でベートーヴェンのピアノ協奏曲第2番を共演デビュー。演奏活動とともにピアノ構造学・改良史・奏法史の研究者として活躍し、講演、レクチャー・コンサートを国内外でおこなう。日本におけるJ.N.フンメルの研究の第一人者。2001年、スロヴァキア国際フンメル協会より「フンメル賞」を受賞。著書『ピアノを読む』（音楽之友社）、『江戸でピアノを』（未知谷）、共著『200CDシリーズ ピアノの秘密』（学研）など多数。現在、日本J.N.フンメル協会会長。国立音楽院講師。2006年度東京芸術センター記念ピアノコンクール審査員。全日本ピアノ指導者協会(PTNA)正会員。
公式ホームページ <http://jnhummel.com>



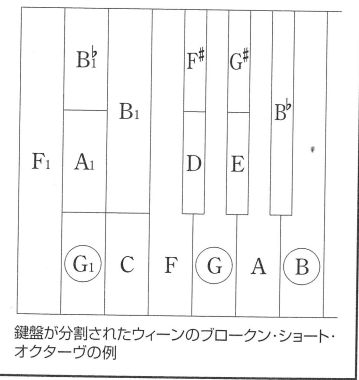
左手の「ドソミン」 アルベルティ・バス



さて、左手の伴奏でおなじみの「ドソミン」は、18世紀ヴェネツィア生まれの音楽家・チェンバロ奏者・作曲家ドメニコ・アルベルティ（1710前後〜40）が、自作のチェンバロソナタに多用した奏法です。これは「アルベルティ・バス」と呼ばれるようになり、その後の古典派で流行しましたが、あくまでもアルベルティが多用したのであって、開発した書法ではないことを付け加えておきましょう。

ハイドンやモーツァルトの鍵盤楽器用の作品に多く見受けられるアルベルティ・バス（譜例2）は、ピアノのように打鍵後に、音がどんどん減衰していく楽器では、水の中で沈まずに泳ぎ続けていくように、和声の変化をさせながら、メロディの背景として、さまざまな表現ができる、とっておきのアイテムです。

しかし、一見簡単そうに見える「ドソミン」が意外とむずかしい。第1指が独立していないため、軽快に奏することができず、さらに指や腕に力が溜まりやすい経験がされた方や、そのような生徒さんを教えておられるレスナーの方々も多いのではないのでしょうか。あのモーツァルト先生も「ドソミン練習曲」を作っているほど、実は力



鍵盤が分割されたウィーンのプロークン・ショート・オクターヴの例

ピアノの左手こぼれ話① ショート・オクターヴ

楽器の左手部分に注目してみましょう。ウィーンでは、18世紀の半ば過ぎまで、チェンバロの低音部の鍵盤の使用頻度の少ない音を省略して音域を下方に拡張し、バスの幅広い和音を

分散させずに演奏できるよう工夫されていました。これをショート・オクターヴと呼びます（右図参照）。下の譜例の最後の左手の10度音程も、右図の○印の鍵盤を押さえれば楽々弾けます。

ハイドン カプリッチョ（8人のだらしなない仕立屋たちに違いないAcht Sauschneider müssen sein）Hob.XVII/1 第365小節～（Moderato）



ピアノ音楽史上初の 左手のための練習曲



1700年頃までのイタリアのフィレンツェにおいて、バルトロメオ・クリストフォリ（1655〜1732）によって世界で初めてピアノが発明され、これを機にピアノがその栄光の歴史をスタートさせたその十数年後、ドイツではJ・S・バッハの次男カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ（1714〜88）が誕生しました。彼

チェルニーの 左手養成ドリル



が入りやすい難しい技法なのです（譜例3）。

トレーニングをするために、漢字練習や計算練習のように、一定のパターンを何度も繰り返し習得する「ドリル型」の練習曲が大量に作られ、販売されました。みなさんは「こんなのつまんない!!」と思われるでしょうが、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番《皇帝》で使われているピアノ技法のすべての音型が、弟子であったチェルニー

の練習曲に収められ、習得できるようになっているのです。レスナーにとっておなじみのチェルニーの100番、110番、30番、40番、50番、60番は比較的右手に重点がおかれています。左手に重点がおかれていますのは、《左手のための練習曲》作品399（譜例4）、《左手のための24の練習曲》作品718、《左

手の練習曲》作品735、《新しい左手の30の練習曲》作品861の4種類です。譜例4の左手はあくまでも伴奏ではなく、「強く、しっかりと弾く」のながら、右手のメロディを際立たせリフトして、「柔らかく、深く、停滞しない」ように演奏しなければなりません。

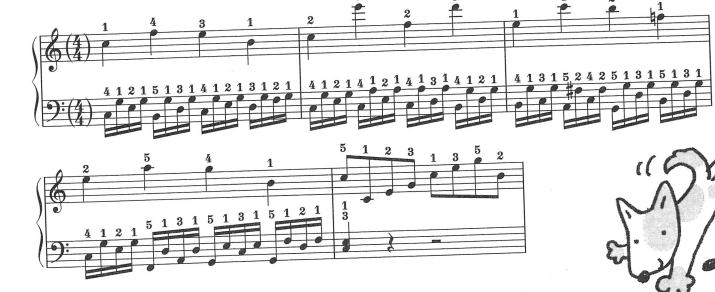
●譜例1 C.Ph.E.バッハ《右手または左手のみのピアノ小曲 Clavierstück für die Rechte oder Linke Hand Allein》



●譜例2 モーツァルト ピアノソナタ 八長調K.545 第1楽章冒頭



●譜例3 モーツァルト《指の練習 Fingerübungen》KV626b/48（ウィーン、1785-89年）より左手中心の部分



●譜例4 チェルニー《左手のための練習曲 Schule der Linken Hand》Op.399-8冒頭



ピアノの左手こぼれ話②

左手が苦手なトレモロ・ピアニスト

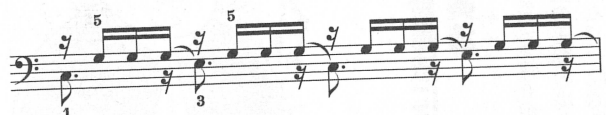


ダニエル・シュタイベルト Daniel Steibelt (1765〜1823)

ベートーヴェンとほぼ同年代で、迷ライバルだったダニエル・シュタイベルトは右手ばかり鍛えて、左手が軽んじられてきたと伝えられ、自作品の左手の部分は、派手にごまかすようにトレモロが多用されていました。（ほんとうのトレモロ奏法はリストにも応用され、高度な技法が必要なのはいうまでもありません。）シュタイベルトは、1796年にパリからロンドンに渡り、翌年ロンドン・デビューしました。この頃発表した迷作(?)ピアノ協奏曲第3番終楽章の《嵐のロンド》では、お得意のトレモロをふんだんに使っています。また、ピアニストで「タンパリンの名手(?)」のイギリス女性と結婚してデュオを組みました。その「ピアノのトレモロ」と「タンパリンのトレモロ」は女性たちを熱狂させました。彼らはタンパリンを実演販売し、おまけにレッスンまでしたそうです。

特集 「左手」に耳をすまそう!

ワンポイント・レッスン1 ■親指を独立させ、軽快に奏するために E.リーベルマン*の練習方法



*ネイカウス楽派でプーニンの父方の系統

ワンポイント・レッスン2 ■各指を独立させ、第3関節の動きを確実にするために 19世紀からおこなわれてきた伝統的練習方法



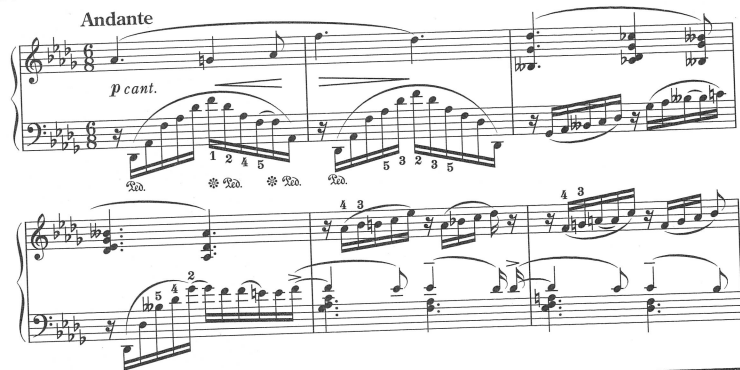
DとFを無音で鍵盤を押し下げたまま「ドソミソ」を弾く
1と2のいずれも、手首と肘の力を十分ゆるめておこなう必要があります。



●譜例7 J.S.バッハ=ブラームス《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ》第2番より《シャコンヌ》冒頭



●譜例8 スクリャーピン《左手のためのふたつの小品》Op.9より《夜想曲》冒頭



ピアノの左手こぼれ話⑤

本格的左手ピアニストの出現



パウル・ヴィトゲンシュタイン Paul Wittgenstein (1887~1961)

ヴィトゲンシュタインは、1913年にウィーンでデビューしましたが、第1次世界大戦のポーランド戦線で負傷し、右手の切断を余儀なくされました。彼は莫大な父の遺産を使って、ラヴェル、リヒャルト・シュトラウス、プロコフィエフ、コルンゴルト、フランツ・シュミットの多くの有名作曲家に左手で弾く曲を作らせた。その結果、ラヴェル《左手のための協奏曲》二長調、R.シュトラウスの左手のピアノとオーケストラのための《家庭交響曲余録》Op.73、プリテン《左手のピアノとオーケストラのための主題

と変奏》、プロコフィエフ《ピアノ協奏曲》第4番変ロ長調Op.53などの40曲近くがヴィトゲンシュタインのもとに集まりました。彼は、これらの曲を武器に、両手のピアニスト以上のヴィルトゥオーソとして名を馳せました。しかし、プロコフィエフの協奏曲は気に入らず演奏していません(初演は、第2次世界大戦で右手を失ったピアニストS.ラップによって1956年に行われました)。なお、彼のピアニストとしての系譜は、ベートーヴェン→チェルニー→レシエティツキ→ヴィトゲンシュタインとなります。

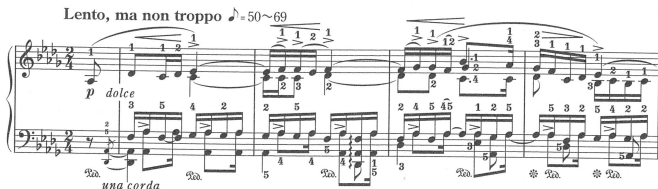
ショパンもびっくり!? 左手だけで弾く《別れの曲》

さて、この項の最後に、最も大切なことに触れなければなりません。それは、右手中心の練習曲において、右手の速いパッセージや困難なフレーズをしっかりと練習しても、単純な音型でできている左手の伴奏だけを暗譜して弾くぐらいでないと、右手の足(?)を引つ張ってしまい、完全な演奏はできません。生徒さんへの指導において、最も注意したい点です。

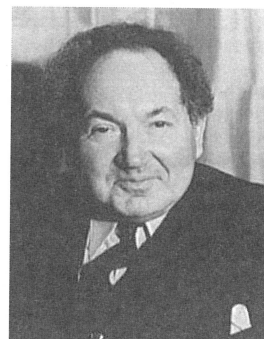
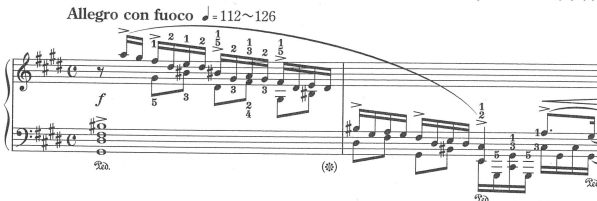
皆さんよくご存じのショパンの難曲を19世紀の偉大なピアニスト、ゴドフスキーがさらに難曲に編曲したのが《ショパンの練習曲による53の練習曲》です。このなかでは、作品10の12曲と作品25の1、5、9、10、12が左手のみで演奏するように編曲されています。実際に左手だけで弾くと、《別れの曲》(譜例5、原曲ホ長調を変ニ長調に編曲)の孤独感がひしひしと迫ってくるようです。《革命》(譜例6、原曲ハ短調を嬰ハ短調に編曲)では、通常より1オクターヴほど低く奏される革命のテーマに、鬼気迫るものを感じます。また、右手の難易度の高い作品10-2や作品25-6の右手パートを左手に置き替えたり、《黒鍵》作品10-5と《蝶々》作品25-9を組み合わせたものなど、左手に過酷な練習を要求するものもあります。

さて、本家ショパン先生の作品は、単純なワルツの伴奏音型やノクターンのアルペジオの伴奏音型でも、練習が十分にできていないと、右手の急速なフィギュレーションやパッセージを

●譜例5 ショパン=ゴドフスキー《別れの曲》Op.10-3冒頭



●譜例6 ショパン=ゴドフスキー《革命のエチュード》Op.10-12冒頭



レオポルド・ゴドフスキー Leopold Godowsky (1870~1938)

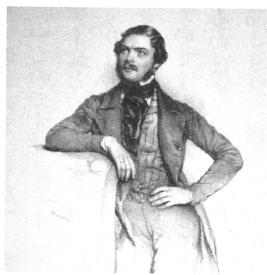
クララに左手の作品を 献呈したブラームス



完全に演奏することができません。これこそ「ショパンは左手!」といわれる所以でしょう。生徒へのレッスンでも、左手のみを練習するのが、むしろ楽しくなるように教えたものです。

ピアノの左手こぼれ話③

左手が得意な大音量ピアニスト



アレクサンダー・ドライショック Alexander Dreyshock (1818~69)

ドライショックは、ドライ(ドイツ語で3)×ショック(ドイツの数量の単位で60)=180人分の音量といわれた、ボヘミア生まれのピアニスト。オクターヴが得意で、ショパンの《革命のエチュード》の左手を、オクターヴで演奏して聴衆を驚かせました。このようなサーカス芸的な演奏をすることが、ピアノの黄金時代ともいえるロマン派の時代にはとても流行りました。

ピアノの左手こぼれ話④

世界初の左手ピアニスト

ハンガリー王室歌劇場の支配人や国立音楽院の院長もつとめたゲザ・ジチイ伯爵は、現スロヴァキア共和国の首都ブラチスラヴァ出身の貴族で、15歳の時、狼の最中ライフルが暴発し右腕を失いました。しかしリストの弟子でもあった彼は、レッスンを受け続け、リスト先生は彼のために左手だけで弾く曲を書き与え、3手連弾と一緒に《ラコッツィ行進曲》なども演奏しました。その演奏はこのほか素晴らしい、ベートーヴェンからラヴェルまでの長い時代に毒舌音楽評論家として活躍したハンスリックですら、「左手だけで弾くジチイ伯爵は、現代

における奇跡を演出している。まるで魔法のようである。しかも、彼は、チャリティ・コンサート以外の演奏会を行わない。聴衆は、彼に敬意を払い、初めて彼の演奏を聞いた人たちは、左手のみで弾かれているとは信じられず、彼らの耳と目を疑ったほどである。豊かな響き、すばらしい表現、明晰な解釈は驚くべきものである」と評しています。ブラームスによって編曲されたバッハのシャコンヌのジチイ・バージョンも当時好評を博したようです。



ゲザ・ジチイ伯爵 Geza Zichy (1849~1924)